

と思います。また、インドネシアからの博士後期課程の留学生の **Anggi Eka Putra** 博士は生命医科学研究科にて博士号を取得し、現在はなんと分子研の魚住グループで博士研究員としてお世話になっています。彼らには、ラボワークも含めてこの10年の研究生生活を非常に助けられました。もちろん、彼ら以外のいずれの学生さんも有機化学を専門的に学んでいないにもかかわらず、よく勉強して食らいつき、知識や技術を次々と吸収して育っていく姿を見ると私も新しい何かを会得して、研究をもっと広げていかなくてはいけないなあとつくづく感じます。幸いなことに、そのひとつの機会として、2014

年9月から1年間には、在外研究の期間をいただくことができました。せっかくの機会なので私も新しいことを勉強しようと、LMU（ドイツ・ミュンヘン）の **Hendrik Zipse** 教授の研究室に滞在し、そこで1年間DFT計算による反応機構解明とスペクトル予測の研究法を勉強させていただきました。Zipse先生の細やかなご指導により、これらの計算手法をマスターすることができましたので、帰国後さっそく小さな計算環境を整え、こつこつと計算実験も始めております。まだ、外に出せるような内容には達していませんが、この小さな芽が私と化学に疎い学生さんとの間の共通の興味となり、よい研究に育っ

てくれればいいなという甘い妄想をしながら、徐々に学生さんも交えつつ丁寧な育てている段階です。

「やっていけるのだろうか」と不安に思ったスタートでしたが、分子研のポスドクとして2年間、そして教員として10年間と何とかまだやっていきます。このように研究生生活を継続できていることはとても幸せなことだと思いますし、まだこの先も継続していけるように頑張りたいと思います。最後になりましたが、そのスタートとなる分子研でのポスドクの機会を与えていただきました魚住泰広教授に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

覧古考新 10 | 2000年

分子科学研究所が1975年に発足して25年目を迎えている現在、分子科学を取り巻く環境は、分子科学の急速な発展とともに大きく変化してきた。環境科学、生命科学あるいは情報科学などが、「物質」をキーワードとする分子科学の周辺分野として発展し、それらの分野にミクロな理解をあたえる科学として分子科学が大きく入り込んでいる。原子・分子の知識が、普遍化した結果であり、とりもなおさず分子科学の進歩の結果であると言える。このような分子科学の広がり、他方分子科学自身の今後重要な問題を投げかけている。つまり、あまりにも多くの道があるために、分子科学の先導役としての分子研がどの道を選択するか任意性がありすぎるように見える。分子研は、その一つとして生命科学と相互作用する方向を選択した。究極の複雑系物質として生命体は、21世紀に学ばなくてはならない重要なターゲットである。

しかし、分子研のもっとも重要な課題は、「道を選ぶ」のではなく「道を作る」ことにある。しかもその「道」はいままで分子科学が通ってきたものの単なる延長ではなく、惰性を捨てて、よじ登っていかなくてはならない方向にある。先導的学術研究の重要な課題は、当面する問題を研究し、その解を求めるだけでなく、次世代に涉って解くべき問題を発見提唱する点である。「次世代への道」を提唱し、共同利用機関として、分子科学がいままで相互作用することのなかった分野を含めた国の内外の研究者と連携しつつ、新たな挑戦をすることが、分子科学研究所に与えられた使命であるといえよう。

分子研レターズ No.41「レターズ」(2000年)
茅 幸二 (分子科学研究所長)